



会報 No.143 令和3年3月号

幼児期における教育・保育の質の向上をめざして

八王子市子ども家庭部長 小 俣 勇 人

早春の候、皆様におかれましては、ますます御健勝のこととお喜び申し上げます。

また、日頃から本市の保育行政について、多岐にわたる御理解と御協力を賜り誠にありがとうございます。特に新型コロナウイルス感染症対策につきましては、職員の健康管理に加え、園内の消毒作業など、感染防止のための取組に日々御尽力いただきながら、保育の提供を継続いただいていることに心から感謝申し上げます。

さて、喫緊の課題であった待機児童問題は、一部地域で引き続き丁寧なマッチングが必要ですが、市全体としては、貴協会の御協力を頂きつつ、様々な取組を実施してきたことにより収束しつつあり、今後は、貴協会でも取り組まれている幼児教育・保育の質の向上に市としても更に力を入れていかなければならないと考えております。

生涯にわたる人格形成の基礎を培うために、幼児期における教育はとても重要であり、知識、IQなどの認知能力（早期教育）だけではなく、自信、社会性、意欲、根気強さなどの非認知能力を高めることが大切であると言われております。

また、本市の就学前児童が通う施設数は、保育園、幼稚園をはじめ、家庭的保育、小規模保育、認可外保育など様々な施設類型を含めて200施設以上、そのほとんどが民間事業者による運営であり、幼児教育・保育を一体的に提供することができる認定こども園化の意向も高まりつつあります。

さらに、保護者に対するアンケート調査（平成30年度）では、「子育て環境充実のため重要だと思う施策」について「幼児教育・保育の充実」と回答した人が37.7%、前回調査（平成25年度）比8.2ポイント増の増加率第1位で、市民からの期待も高まっております。

これらのことを踏まえ、本市では、幼児期における教育・保育が極めて重要であると認識し、より一層の幼児教育・保育の質の向上を図っていくために、専門的な担当として「幼児教育・保育センター」を設置し、もう一段上の取組を推進してまいります。

このセンターでは、幼児教育・保育者の資質と専門性の向上を図り、保・幼・小接続の進展、特別な配慮を必要とする子どもへの指導の充実、研修機会・参加者数の拡充、教育委員会をはじめとする関係機関との連携強化などを推進し、幼児期における教育・保育実践の質の向上を総合的に推進し、専門的な指導・助言ができる取組を推進してまいります。

本市では、毎年約3,000人の子どもが生まれ、その一人ひとりがそれぞれの家庭環境のもと、日々成長し、保育園や幼稚園等に通い、その後、小・中・高等学校あるいは大学を経て自立していきます。八王子で育って良かったと振り返ることができるように、自らの道をしっかりと歩むことができるよう子ども・子育て支援に全力で取り組んでまいりますので、より一層の御協力をお願いいたします。

結びに、八王子市私立保育園協会の益々の御発展と各園の皆様の御健勝を祈念し、御挨拶とさせていただきます。

研修報告

「子ども」とそこにかかわるすべての「大人」の 幸せを願った研修会

保育研究委員会 林 奈緒子

令和2年度第2回保育士研修会「保育の質の向上を考える」を令和3年3月3日、13時30分～14時45分に開催しました。新型コロナウイルス感染症の拡大防止の為、オンラインにて行い、講師として、大豆生田啓友（おおまめうだ ひろとも）氏をお迎えしました。

大豆生田氏は保育学・幼児教育学・子育て支援を専門とされ、日本保育学会副会長、日本乳幼児教育学会理事、こども環境学会理事、厚生労働省の保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会の座長代理を務める他、NHK Eテレの「すくすく子育て」に出演されています。多くの著書があり、研修会でも大人気の方です。

1時間の中で、すべての園で子ども主体の保育を保障するために、保育者の在り方と子どもの姿を事例と写真で分かりやすくお話してくださいました。一見、気になる姿がある子どもに対しても、その子どもの気持ちに寄り添って理解しようとすることや、同僚とその姿について語り合うことの重要性、環境構成、子ども主体の協同的（協働的）学び、ドキュメンテーション、園外保育の見直し等、身近な課題を考え、アドバイスを頂く内容でした。また、1時間の講演後、研修中に頂いたチャットでの質問と事前に頂いていた質問にも答えて頂き、参加者138名の実り多き時間でした。

ここからは、自園で研修に参加した職員の感想をご紹介します。

大豆生田先生の言葉の一つ一つに温かみを感じ、保育士という仕事の面白さや奥深さを改めて感じた研修となりました。私が最も心に響いた言葉は「一人一人が今日一日幸せだったと思える保育が大切。」ということです。その言葉から保育者の温かい言葉掛けをしている姿や友だち同士が関わり合って遊ぶ姿や沢山の笑顔や真剣な眼差し等が想像できました。

事例①のHくんのように、「気になる姿の子」、「友だちとのトラブルが多い子」として、「問題のある子」と捉えられがちな子どもはどこの園にもいると思います。なぜぐずること、嘔みつくこと、物を投げること、暴れること等で自己表現するのだろうと、一つ一つの行動をよく観察してその子どもの気持ちに寄り添い、理解しようとするのが大切です。しかし、「忙しい。」、「他に見る子どもが多い。」、「どうしていったらいいのか

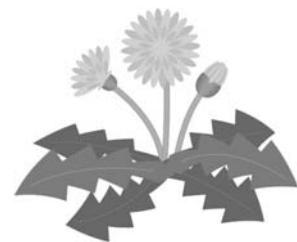
分からない。」等々のマイナスな言葉を耳にすることがあるかもしれません。そんな時の対処として、一人だけで頑張ってみようとせず、担任同士はもちろんですが、他クラスの担任や多くの職員と連携をとり、子どもの姿を共有していくことで前向きになれると思いました。また、Hくんが散歩先で見つけた栗をきっかけに、楽しさから好奇心をくすぐられたと捉えた保育者は、絵本で「栗」を再確認する機会をつくりました。子どもの声を拾って、「また栗を見つけに行こうか。」と次の展開へ広げていき、拾ってきた栗を透明のカップに入れて名前を付けて飾りました。この一連のプロセスの一つ一つが大切であると実感し、それは一人の楽しみが皆の楽しみになった瞬間であったとも感じました。

事例②では、石についてのお話でした。子ども達は誰に教えられた訳でもないのに石が好きです。興味を持って拾ったり、転がしたり、投げたり、大きさ比べをして楽しんでいます。自園の5歳の男の子も園庭にあった大きい石を別の石で叩いて、「ちょっと割れた気がする。」と少し入ったひびを見て大喜びをしていました。何度か繰り返し叩くと灰色の石の一部が削れて、橙色に変わったことを不思議がっており、その子どもにとっては大きな発見だったのだと感じましたが、この時はここから活動が広がりをもつ方向にはならず、今思うと残念だった気がします。今後は、今日の学びを活かした保育を目指したいと思いました。

そして、家庭を巻き込んで石を拾ったり、飾ったりと様々な展開をドキュメンテーションとして記録に残すことも、とても素敵なお話でした。保護者に写真で公開する「保育の見える化」は子ども達の取り組みやブームになっていることが分かりやすくなり、子どもと家庭と園が相互に繋がっていきます。そのことにより、遊びがどんどん広がっていくきっかけにもなると思いました。自園ではネットにおける写真の共有化（販売）はあるものの、日誌は従来の文章だけの形態です。「保育の見える化」をすることで親子の会話が広がり、良好な関係につながることもあるので日誌の在り方を再検討し、ぜひ取り入れてみたいと思います。

また、一日の振り返りのサークルタイムという子ども同士が話し合う場面も印象的でした。自分の考えを言葉で伝えるだけでなく、友だちの言葉にも耳を傾けることが自然と養えます。自分にはない考えを認めたり、自分の考えを認めてもらう中で、みんなの自己肯定感が育まれていくのではないのでしょうか。このように、対話するほんの数分を大切にすることがとても素敵なので、ぜひ真似をしていきたいと思いました。

今回の研修のテーマとなった「保育の質の向上を考える」は、今みんなのできることのヒントを与えていただく機会となりました。保育を振り返り、「今日はこんなことを面白がっていたね。」「明日はこれを用意してみたらどうかな。」等、保育士同士がコミュニケーションをとり、楽しみながら保育をすることが子どもの主体性を大切にしていける保育に繋がります。それが子ども達の遊びを夢中にさせることに繋がることで「明日も保育園に行くことが楽しみだな。」と感じていくことでしょう。専門的な保育の知識も身に付けながら、保育者、保護者、地域の方々とのチームワークの向上を図り、子どもと共にわくわくできる毎日を過ごしたいと思っています。



シリーズ 私の保育園

からまつ保育園

園長 坂本 真弓

園の南には浅川が流れ、法人敷地内の40本の桜が子どもたちの成長を見守り、広い園庭、四季折々の自然に恵まれた環境にからまつ保育園があります。昭和53年4月に開園し、子育て支援センター、病後児保育室と園児だけではなく、子育て家庭のサポーターとして現在も歩みを続けております。

平成28年には、皆様のご協力やご指導を頂きながら全面改築をおこない、子どもたちが安心して生活し、働く職員にとりましても、仕事のしやすい、使いやすいびかびかの園舎が完成いたしました。職員の意見を聞き取り、子どもにとっての安心、安全な環境はどのようなものか、また、自分たちが働く上で必要な環境はどのようなものかと話し合いを進め現在の形になりました。クラス名のマークも「あーでもない」、「こーでもない」と悩み考えながら作り上げたものです。些細なことかもしれませんが、現在も自分達の意見が実現している園舎で働くことは職員の自信につながっているようです。

さて、そのような中、現在新型コロナウイルス感



染症の予防対策でどの保育園もご苦労されていることと思います。当たり前が当たり前でなくなり、保育内容や環境も随分変更しました。また、行事も中止をしたり、ビデオに撮影をして子ども達の成長を見て頂くなどと様々な対応を図っております。職員は看護師を中心に日々園内や玩具の消毒、健康管理をし、保育士は子どもたちの手洗いやうがい、手指消毒の指導と意識を高めながら頑張っています。きっと皆様の園も同じことが言える事と思います。ですが、そのような中でも子どもたちは元気に成長を見せてくれております。「子どもは強い！」遊びや生活が多少変わっても子どもたちはめげてなんかいません。それ以上に楽しんだり、楽しもうと作り出すチカラを見せてくれています。大人も負けていけない！と令和3年度は出来ないでなく、実践するにはどうしたらいいかを職員と考えていきたいと思えます。今後とも協会園の先生方のご指導、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

少し早い桜の開花が巣立っていく子どもたち、新しい生活に入ってくる子どもたちを見守っています。よき春が皆様に訪れることを願います。



編集後記

三月、園では進級に向け少しずつおたくが始まります。お兄さんお姉さんのクラスで過ごしてみよう、園服のボタンかけ遊びをしてみよう、など良いスタートが切れるようにとの担任の思いが伝わりじんとくる季節です。この一年、コロナ禍でも子どもたちは変わらずに逞しく元気でした。景色がモノトーンにも見えた春の緊急事態宣言期間も子どもたちのパワーのおかげで明るい気持ちでいられました。そんな子どもたちと過ごせることに感謝し、また新しい出会いにわくわくしながら4月を迎えたいと思います。 (板野)